

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2007年3月 第9号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email omiya@church.jp

わたしもこの教会で

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

冬なのに暖かい天気が続いてきて、このまま春を迎えつつあるこの頃ですが、皆さんは元気でお過ごしのことと信じます。こちらの小学校では風邪も流行っていて、元気な我家の一人息子も今年の風邪には悩まされました。

2月9-12日の連休の間、北海道のパパのところへ行ってきて熱を出して、三日間学校を休む羽目になりました。そのお陰で、2月はスケジュールが少しきつかったかな？という感じでした^^；流行っている風邪のために息子の小学校ではクラスを閉鎖するところもありましたが、息子のクラスはぎりぎりの線で続けることができました。休んでいる間、近所の友だちが学校からの連絡カードを届けてくれました。連絡カードにはその日に学んだことや友だちの手紙が書かれていましたが、手紙の一つに、「おまえがこないからきゅうしょくがのこってる…」と書いた手紙があって、思わず笑ってしまいました。どうやら、学校の給食に残ったものの処理は息子の手番らしいです。白井(パパ)に言ったら「おれと同じじゃん！」と、嬉しそうな声で返事が返ってきました。そんなところ似てどうする？という思いですが、食べた分だけ身体も心も元気に育てて欲しい思いを込めて、今は元気に学校へ送っています。春になったらまた北海道のパパのところに行くことを楽しみに、息子も、少しばかり残っている3年生の最後の学校生活を楽しんでいきます。

さて、2月18日の変容主日の礼拝の中で、10年以上この教会に通っていた青年が洗礼を受けました。長い間の教会の祈りが実りを出したときでした。今回の洗礼式を執り行いながら、神さまの大きな働きに気づかされました。新しく生まれた教会(洗礼者)がまた新しい教会を導き出していく、主の復活の証人としての働きを担うのだという確信です。実は、今回の洗礼式・堅信式が証しとなり、礼拝に出席していた他の教会の方が「わたしもこの教会で、皆さんと一緒に信仰生活を営みたい」との表明をしてくれました。わたしたちは、洗礼を受ける決心をしたときから、キリストの復活の証人としての働きを担うようになるのだということを、いいえ、そのときから、主がわたしたちをご自分を証しする弟子として用いてくださるということを、この主日の洗礼式の出来事を通して深く感じました。このことは、まだ洗礼を受けていない人々を主の弟子として招いてくださると約束してくださる神さまの約束と信じています。新しく生まれた教会を通して働かれる主の働きが待ち遠しいです。

聖書のみことば

創世記 45章 3～15節

ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。そして、ゴシェンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。そこでのお世話は、わたしが引き受けいたします。まだ五年間は飢饉が続くのですから、父上も家族も、そのほかすべてのものも、困ることのないようになさなければいけません。』さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。エジプトでわたしが受けているすべての栄誉と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。」ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。

1コリント 14章 12～20節

あなたがたの場合も同じで、霊的な賜物を熱心に求めているのですから、教会を造り上げるために、それをますます豊かに受けるように求めなさい。だから、異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい。わたしが異言で祈る場合、それはわたしの霊が祈っているのですが、理性は実を結びません。では、どうしたらよいのでしょうか。霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう。さもなければ、仮にあなたが霊で賛美の祈りを唱えても、教会に来て間もない人は、どうしてあなたの感謝に「アーメン」と言えるでしょうか。あなたが何を言っているのか、彼には分からないからです。あなたが感謝するのは結構ですが、そのことで他の人が造り上げられるわけではありません。わたしは、あなたがたのだけよりも多くの異言を語れることを、神に感謝します。しかし、わたしは他の人たちをも教えるために、教会では異言で一萬の言葉を語るより、理性によって五つの言葉を語る方をとります。兄弟たち、物の判断については子供とってはいいけません。悪事については幼子となり、物の判断については大人になってください。

ルカによる福音書6章27-36節

「しかし、わたしの言葉を聞いているあなたがたに言うておく。敵を愛し、あなたがたを憎む者に親切にきなさい。悪口を言う者に祝福を祈り、あなたがたを侮辱する者のために祈りなさい。あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬を向けなさい。上着を奪い取る者には、下着をも拒んではならない。求める者には、だれにでも与えなさい。あなたの持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな恵みがあるろうか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。また、自分によくしてくれる人に善いことをしたところで、どんな恵みがあるろうか。罪人でも同じことをしている。34 返してもらおうことを当てにして貸したところで、どんな恵みがあるろうか。罪人さえ、同じものを返してもらおうとして、罪人に貸すのである。35 しかし、あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんのお報いがあり、いと高き方の子となる。いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深いからである。36 あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。」

説教

『情け深く、憐れみ深く』

昨日、美容院から帰ってきたら猫に嫌われてしまいました。長かった髪の毛を切り、しかもパーマを掛けてきたわたしの様子が変わりすぎたのでしょうか。猫は、食卓の下椅子に入ったまま出て来ないのです。それだけ餌の時間を楽しみにしていたのに、餌を上げても寄ってきません。30分位経ってから、わたしがいないときを狙って餌の前に現れたのですが、わたしが後ろを歩いていきますと背中を立って、鋭い目で後ろを警戒しながらわたしの行動を観察するのです。無理に抱っこしたらぶるぶる震えながら、本当はわたしから逃げたいけど怖くて、手足が自由に動かないために逃げられないと訴えているような様子でした。愛する者の姿が変わって

しまったことに、猫は裏切られた思いさえ抱いたのではないかと思ったときでした。実は、猫よりも、わたし自身、こうなるとは想像もしていなかった分だけ、どうすればいいかわからなくて、このままこの子に嫌われてしまったらどうしようと、不安と悲しみと寂しさの中で本日のみことばを黙想していました。

さて、福音書からみことばをきいていきたいと思います。わたしたちが自分にとっての敵について語る際、だいたいは、自分の中で自分から嫌われている相手のことやまたは、わたしにとって苦手な人のこと、自分が敵対視している人のことを自分の敵として位置づけるのではないのでしょうか。

しかし、聖書はそうは語らないのです。わたしにとっての敵とは、今のわたしの心の状態が積極的に決め付けている相手とは関係のない相手であると言うのです。つまり、むしろその逆、相手からの積極さが強調されるのです。わたしを「憎む者」、わたしを「悪口する者」、わたしを「侮辱する者」、このような相手がわたしにとっての敵であると言うのです。

それでは、このような敵に対してわたしはどのように向かい合うべきか。聖書は、「あなたがたを『憎む者』に親切にしないで。」「あなたがたに『悪口を言う者』のために祝福を祈りなさい。」「あなたがたを『侮辱する者』のために祈りなさい。」と勧めています。そして、さらに、敵がわたしの実際の生活に損害をもたらす場合であっても、それを積極的に受け入れることを勧めるのです。「頬を打つものには、もう一方の頬を差し出すように。」「上着を奪い取るものには、下着をも拒んではならない。」「求めるものには誰にでも与える。」「持ち物を奪う者から取り返そうとしてはならない。」と。

さて、果たして、私たちがこのような勧めの言葉に実践して立つことができるのでしょうか。私たちの置かれている状態は問わず、一方的に語られる聖書の言葉ですが、それを生活の中で実践して立てるかどうか。猫との関係でさえ相対的になって悲しんだり、寂しがったり、それでやな虫かないこんな自分が、しかもこれだけ損害を

もたらす相手を受け入れていくことに、むしろ抵抗さえ感じるのです。

ところが、イエスさまはどうなさったでしょう。本日の箇所の中でこれだけのことを勧めておられるイエスさまご自身、私たちに勧めておられる通りにはなさいませんでした。ヨハネによる福音書 18:19 からは十字架に付けられる前夜、イエスさまが大祭司から尋問される場面が記されています。

「大祭司はイエスに弟子のことや教えについて尋ねた。イエスは答えられた。『わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。なぜ、わたしを尋問するのか。わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている。』イエスがこう言われると、そばにいた下役の一人が、『大祭司に向かって、そんな返事のしかたがあるか』と言って、イエスを平手で打った。イエスは答えられた。『何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。』アンナスは、イエスを縛ったまま、大祭司カイアファのもとに送った。」

この場面で、イエスさまは、片方の頬を打たれたからといってもう一方の頬を差し出してはいないのです。ご自分に向けられている裁判について当然なこととして抗議

をなさっております。

これだけではありません。「裁くな！」と弟子たちに勧められる方が、ファリサイ派を痛烈に批判しておられたことも事実です。ですから、今日の箇所を通してイエスさまが語ろうとしておられることは、このことを文字とおりに理解し、行なうことを勧めておられることではないことがわかります。そうではなく、この勧めの中には隠れている大切な意味があるということなのです。つまり、わたしたちが、「愛する」ということの本当の意味を知り、自由な愛を示していく者として導かれることを願って、深い愛を語っておられるのです。ですから、わたしの心の今の状況は問わないのです。自由な愛のまなざしに生きるということは、わたしのおかれている状況、心の状況に左右されることではないからです。

私たちは愛することにおいて不自由なものです。相手が誰であるかによって、あるいは相手がどのような状況の中にいる人かによって、または相手の態度によって自分の態度が変わってくるからです。相手の取る行動によって自分が決められていく、相手の生き方に自分の歩みが支配されてしまう。私たちの中身はそれだけ弱く、ですから、自分の好みや自分にどれだけ恩を着せてくれているかによってしか相手を受け入れようとしなくなるのです。このように、相手によって決められていくわたしの歩みですから、わたしたちの愛の眼差しは不自由なものであって、不自由な愛し

か示すことが出来ないのでしょうか。今日のイエスさまの言葉は、このようなわたしから脱出すること。そして本当の愛に生き、そのために必要ではない高いバリアは崩すのだということを語るために勧められる言葉です。

ですから、イエスさまが教えておられる愛は自由な愛であるがゆえに、殴られればいつでも、どんなときでももう一方の頬を差し出さなくてもいいのです。時には忍耐し、時にはゆるし、時にはたしなめ、時には抗議する場合もあります。

先ほどもヨハネの福音書をお読みし増しように、イエスさまは、十字架にかかれる前夜の大祭司の庭での裁判の際には強く抗議しました。ファリサイ派の人たちの議論にも強く批判をしていました。しかし、十字架にかけられた際に、十字架の上で、イエスさまはご自分を鞭打ち、十字架につけている兵士たちや他の人たちのために神さまに祈るのでした。「彼らは何をしているのかわかりません。父よ、彼らをお赦してください」と。

このように、抗議されるべきところでは抗議し、批判するべきところでは批判を続けながらも、しかし、どれだけ「敵」のような相手であっても祈らなければならないところでは相手のために祈っておられたということ。ですから、大切なことは、抗議される際も、批判を続けられる際も、イエスさまは自分が批判し、抗議する相手に対して憎しみを込めていなかったということ。それは、憎しみに支配された方ではありま

せんでしたから。罪の奴隷ではなかったということです。つまり、イエスさまの愛の眼差しは、相手の行動や態度によって変わり得る愛ではなかったということです。問題に上がっている事柄についてのみ抗議し、批判し、罪の奴隷ではなく愛のしもべとしていられることこそが神に従う道であることを、イエスさまは示しておられたのです。

このようなイエスさまの姿に従う一人の母親のことを覚えています。

わたしがまだ高校生のときだったと思いますが、韓国で一つの子ども誘拐事件がありました。5歳の息子が誘拐されたのです。国中が大騒ぎになってこの事件の犯人を捜していました。ある歌手は歌に誘拐された子どもの名前を載せて、早く帰ってくることを訴えていました。しかし、事件の結果は子どもは殺されていた。ところが、人々の心を打つようなことは、事件が解決して一年後に起こりました。殺された子どもの母親が、毎日、牢屋にいる犯人を訪ねていくのです。犯人が心から反省できることを求めて、犯したことの罪がどれだけ重いことなのかを、悔い改めることによって自分自身の中で受け止めて欲しいから、毎日牢屋を訪問するのです。母親が信じている神、イエスさまを彼に紹介し、彼は、知らされたイエスさまによって、心から家族に謝罪することが出来た。つまり、自分がどれだけ悪いことをしたのか、やっぺはいけないことをやってしまった罪の重さを知らされたのです。

自分の息子を殺した犯人が本当の意味で謝罪できるように、悔い改めさせる働きに出かけたこの母親の姿。「犯された罪を憎んでも人間そのものを憎んではならない」という神の愛の教えを、彼女は生きたものとして受け止めていたのです。

このような話を聞きますとき、わたしたちは、わたしには到底出来ないこととして片付けてしまいたくなります。しかし、本当は出来ないのではなく、やっぺもみないうちに諦めてしまう面もないしはあるのではないのでしょうか。愛することを諦めてしまうとき、人はその反対のことを示すしかありません。罪の奴隷になって、罪に支配されて、嫌な相手に向かって気が済むまで呪い、憎みを注ぎ、悪口を絶やさなくしていく。

このような自分の姿を想像してみてください。そんなときの自分は自分らしい自分なのかどうか。本来のあるべき自分なのかどうか。わたしたちが罪の支配下に生きることを選び取る際、わたしたちは、本来の姿を失ってしまっていることに気づきません。罪の力が気づかないように働いているからです。罪の奴隷でいるわたしを罪が喜んでいるからです。他者を憎むということは、結局自分自身を虐待してしまっているということを、わたしたちは用心したいです。

ですから、ルターは、わたしにとって本当の敵は外にいるのではなくわたしの中にこそいると言っていました。わたしの中にいる深い罪の種が芽を出し、わたしの中で

成長し、わたしを苦しめていくのです。

このような私たちが、自分らしく、本来の姿を取り戻すことのできるためには、帰らなければなりません。あのキリストの十字架の許へ帰るしかないのです。敵にいのちを奪われながら、十字架の上で敵のために祈られた方の愛の下へ帰るのです。「父よ、彼らは何をしているのかわかりません。彼らをお許してください」と祈りながらいのち絶えて逝った主の十字架の愛に立ち返るしかないのです。そこで、自分の今の姿を見るのです。罪の奴隷になって自分らしくいられなかった自分の姿をしっかり見つめるのです。実は、イエスさまを十字架に付けていたのは他誰でもなくこのわたしであったということです。わたしの中の罪の力が日々イエスさまを十字架につけていたことを、わたしたちは知らされてはじめて自由になっていくのではないのでしょうか。それは、そこでこそ本当の愛に出会ったから、本当の、真実の道を示されたからです。今自分が犯していることの重さ、大切さが知らされたからです。今の自分の姿がはっきりと見えるようになったからです。今までの自分の姿が、イエスさまに批判され抗議されていた人々の群れの中から見えるからです。子どもを誘拐し、自分が何をしているのかわからない罪の只中におかれていた、あの犯人の姿から自分の姿を見るからです。十字架の愛、本物の愛に出会ってはじめて、自分の今の状況がはっきりと見えるようになる。

だけど、このような自分であるにも関わらず、主はわたしたちを十字架の愛へと

招いてくださいました。あなたのようなものは受け入れられないと厳しく叱って、追い出してしまってもいいのに、むしろ招いてくださったのです。再び新しく作られた者として歩むように、導いてくださるのです。罪の下で死んだように生きるのではなく、生々とした生を、いのちを輝かせながら生きるようにしてくださるのです。どのような相手であっても、相手の顔をうかがって、相手の態度で自分を決め付けて生きるのではなく、自由な愛の眼差しの中で生きる者であるように、励ましておられるのです。

ですから、実は、主の片方の頬を打ったのは、このわたしでした。そのわたしのためにもう片方の頬を差し出してくださいました。主の愛。主の上着を奪い取っていたこのわたしのために、下着まで差し出してください、主の持ち物を奪い取ろうとしていたわたしのために、ご自分のいのちまで惜しむことなく差し出してくださいました。相手がこのような私であるにも関わらず、わたしの行いを問うことも泣く、ご自分のすべてを差し出してくださいましたイエスさまの愛のまなざしに生きようではありませんか。今から、ずっと御許へ呼ばれるその日まで、この世を生きるわたしたちは、この愛にこそ生きようではありませんか。この方は、情け深く、憐れみ深い方ですから。この方は、恩を知らない悪人にも情け深く、憐れみ深い方ですから、私たちがイエスさまの十字架の愛の恩を知らない者としての歩みを続けていたとしても、こうしてご自分の

許へ、礼拝へ招き、ご自分の身体と血に与るものと認めてくださっておられます。これは、無条件に愛してくださる神さまの愛にほかなりません。今週、わたしたちは、

この主の愛に預けられた者として、自分の中にある敵の只中で、主の愛を示しながらともに歩いていきましょう。



【礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10時30分～

3月4日(日) 四旬節第2主日 聖書：エレミヤ 26:7-9・フィリピ 3:17-4:1・ルカ 18:31-43 説教題：何をして欲しいのか 讃美歌 64(教会)/303(教会)/307(教会)
3月11日(日) 四旬節第3主日 聖書：出エジプト 3:1-15・1コリント 10:1-13・ルカ 3:1-9 説教題：「わたしはある」という方 讃美歌 73(教会)/306(教会)/389(教会)
3月18日(日) 四旬節第4主日 聖書：イザヤ 12:1-6・1コリント 5:1-8・ルカ 15:11-32 説教題：その日には「救いの泉から水を汲む」 讃美歌：66(教会) 292(教会)/298(教会)
3月25日(日) 四旬節第5主日 聖書：イザヤ 43:16-28・フィリピ 3:5-11・ルカ 20:9-19 説教題：見えない輪 讃美歌 70(教会)/318(教会)/317(教会)

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 毎週水曜夜7時より礼拝を行っています。日曜日の日課と同じものであるため別枠での予定表は載せません。日曜日の礼拝に出られなかった方々のための礼拝です。ので、どうぞなたでも自由にご参加ください。
- ・ 3月11日(日曜日)は、柴田千頭男先生が礼拝説教のご奉仕をなさいます。
- ・ 4月より、女性の視点から聖書を学ぶ会が金曜日午後3時より始まります。
- ・ 随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。